

## 第二章 戦野

宇宙暦八〇〇年、新帝国暦一年五月。自由惑星同盟首都ハイネセンは混乱の極にある。ヤン・ウェンリーが政府の謀殺の手を逃れて宇宙の深淵へと逃げ込んだあと、事態を察したシユタインメツ艦隊が衛星軌道に侵入、同盟政府に対して『事態の説明』を求め、同盟政府が『説明』に窮した経緯はすでに述べた通りである。

同盟政府にしてみれば、ヤンを謀殺しようとした挙げ句にシエンコップらの薔薇の騎士連隊に反撃を受けてレベロ議長を拉致され、そのレベロが彼らに対してレンネンカンブの誘拐を黙認引き替えに我が身の自由を得るなどと言つ裏取引の上で、ヤンの逃亡を認めた……など帝国に対して説明のしようがあるはずもなかった。

「あざとい謀略と仰るが、小官はあくまで提案しただけであり、採用なさったのはあくまで議長閣下であります。小官に言わせて頂ければ、実施に於いて不備がありすぎたと申し上げるべきでしょうな。」

そもその混迷の原因となったヤンの謀殺、その最初の提案者であったはずのロックウェル大將は、責任を問つてレベロに対して厳格な無表情さを僅かも動かさなかった。

「私は一介のブレインに過ぎませんぞ、今更私の責任を問つなどと言われても……むしろ、薔薇の騎士連隊どもの無法な復讐への護衛をお願いします。もし、私の生命や資産に何かあった場合は、閣

下の政治責任を大いに問わせて頂きますからな」

機会を捉えてのヤン一党の一網打尽と抹殺を示唆した、国立自治大学のオリベイラ学長も、責任逃れと脅迫とを緋い交ぜに逆にレベロの不手際を責めるばかりであり、レベロは軍もブレインも事態を打開する上で何の助けにもならぬことを思い知らされるばかりだった。

さらにレベロを不安に陥れたのは、『皇帝ラインハルト暗殺未遂犯』の逃亡だった。逃亡犯の名はグレーチェン・ヘルクスハイム同盟軍大尉。帝国軍による同盟領侵攻作戦<sup>プロクナロック</sup>神々の黄昏<sup>グッドモーニング</sup>開始直前、同盟に亡命していたゴルデンバウム王朝最後の皇帝『エルウィン・ヨーゼフ二世』は帝国の要求に従つて、フェザンへ赴いた。その時、ラインハルトとの会見場である帝国軍旗艦『ブリュンヒルト』まで皇帝に付き添ったのが、ヘルクスハイム大尉だった。

爆発が起きたのはまさにその会見の場であり、どのような手段に拠つてか、皇帝が『人間爆弾』に仕立て上げられていたものと推測された。誰が、どのような意図を以て事件を起こしたのかは不明だが、犯罪によつて最大の利益を得るものが犯人であるとすれば、この時点の宇宙でラインハルトの死を最も望んでいたのは、まさにこの黄金の有翼獅子にのど笛を噛み千切られようとしている自由惑星同盟以外にあり得なかった。

レベロは同盟政府が無実であることを知っている。しかし、第三者的な視点から言えば、動機・手段・結果による利益、いずれを取つてみても最有力の容疑者として糾弾されるべきが彼の政府であることに反論の術はなかった。

帝国が、なぜグレーチェン・ヘルクスハイムという一介の女性士官に興味を示し、ヤンの逮捕勧告と同時にその身柄の引き渡し

を求めてきたとき、不断の重圧を前に平衡を崩しかけていたレベロの精神は、帝国軍が彼女を『皇帝暗殺未遂事件』の犯人と目しているとの判断に傾いてしまったのである。ヤンを逃しても、『皇帝暗殺未遂事件』犯を押さえる。逆に、『皇帝暗殺未遂事件』犯に逃亡を許しても、ヤンを確保できれば、いずれにしても同盟への再侵攻への口実となる。レベロは、奇妙に歪んだ視野の捕らえた風景を真実と信じ込み、ヤンとヘルクスハイム大尉、二人ながらの謀殺を実行に移した。

結果としては完全な失敗。ヤンばかりか、どうやらヘルクスハイム大尉までが、その後見役のベンドリング大佐とともにヤン一党に身を投じ、ハイネセンから脱出してしまったらしい。報告を受けたレベロの視野が一瞬のうちに空白に変じたのも無理からぬことだった。

「統合作戦本部情報部長だったというのか？」

ヘルクスハイム大尉の後見人の経歴は、レベロが感じたのは怒りではなく、絶望と自失だった。

「なぜ、亡命者などをそんな枢要の地位に就けたのだ？」

ベンドリングの失踪が引き金のよつに、統合作戦本部の各部署でも無断欠勤者や病欠者が続出。その大半が、あるいは家族もろとも、あるいは妻子を半年以上も前に出身星系に転居させた上で消息を絶つたことも間もなく明らかになった。甚だしきはロックウエル大将の次席副官までが事件後直ぐに行方を眩ませたばかりか、空席はさらにはレベロやその他主要閣僚の秘書スタッフにまで及んでいたのである。彼らがヤン一派、もしくはベンドリングに密かに情報を流し、彼らがハイネセンを立ち去るのと相前後して、自らの安全を求めて失踪したのは明らかだった。

「ヤン元帥と面会させよ、レンネンカンフ高等弁務官の所在を明らかにし、その身柄を直ちに保護せよ」

シュタインメッツからの要求は連日のように同盟政府の聴覚を叩き続けたが、レベロに答えるすべのある筈もなかった。さらに帝都での決定を受け、シュタインメッツは同盟政府に新たな要求を突きつける。

「五月末までに同盟政府による経緯の詳細な説明と、ヤン元帥と本職の会見が実現されなければ、帝国は同盟政府にパーラトの和約遵守意思なしと見なして同和約を廃し、帝国による行動の自由を宣言するものである」

最高評議会の議場のスクリーンの中、シュタインメッツはそう宣言し、レベロらの応答を待たずに通話を遮断する。

暗転したスクリーンを前に、議場に残された同盟最高評議会のメンバーは白茶け、能面さながらに硬直して表情を失った顔を見合わせ、交わす言葉すらなかつた。呼吸さえ忘れ去られたように静まりかえる議場の中、誰もが席を立つ気力も失い、力なく座席に身を埋めたまま身じろぎもしなかつた。

「シュタインメッツ提督の宣言は、二五〇年の余を閲した自由惑星同盟の死亡宣告だった」

ある歴史家が評したよつに、シュタインメッツの最後通牒は、既に崩壊と分裂への坂道に足を踏み入れていた同盟の背に強かな一撃を加えたも同然だった。

時は前後するものの、五月一日にはケリム星区が、星区選出の評議員コーネリア・ウィンザーの名で同盟からの離脱を宣言し、帝国の保護下に入る旨を宣言している。

「帝国の了解のもと、本星区の帝国への帰属可否を住民投票に問います。同盟政府がもはや統治能力を失い、私たちに安全を保証できない以上、私は市民のために最善と思われる策を採るべき時と信じます」

ウィンザー女史の提案は、熱狂的と言わぬまでも一部の熱心な多数の消極的な人々によって支持された。ウィンザーはさらに、自らへの星区政府主席代行就任を要求し、星区政府がこれを拒否すると、街頭で彼女の支持者たちに訴えかけた。

「いまこそ強力な指導力のもと、この星区を挙げての体制で帝国との共存、さらには将来的な帝国への帰属の道を歩まなければ、ケリムは自由惑星同盟とともに宇宙から消滅の非命を受けることとなるでしょう。帝国は、バラトの和約を廃し、再度の軍事侵攻を宣言しました。同盟軍に過去の力はなく、ヤン・ウエンリーですら見捨てた同盟政府が、皇帝ラインハルトの親征の前に、同盟と呼ばれていた何もかを残すことができるはずはありません。今、優柔不断の、衆愚の病に冒された政府に取って代わり、私たちの私たちによる私たちのための政府を樹立すべき時が来たのです。真にケリムを憂える人々よ、私に続いて下さい！」

「まったく小トリユーニヒトそのものですね。あの女に、あれだけの煽動の弁舌が振るえるとは思ってもみませんでしたな」

「人は見かけによらぬものっていうのかね」

ウィンザーの演説を、ヤンが目にしたのはポリスーン星系のダヤン・ハーン。廃された旧補給基地の旧大会議室が、作戦会議室として使えるよう、情報・通信・航路等の表示スクリーンと端末が備

えられている。メルカツが、『動くシャワーウツドの森』を率いてこの基地に入った時に改装されたもので、合流して以来、ヤンの居所になっている。司令官執務室を別に設ける案も出たが、ヤンはあつさり却下した。

「ここを使うから良い。わざわざ別室に部屋を設けたんじゃ、一々ここへ歩いてこなければならぬだろう」

「歩くのが嫌なら、この上の部屋を執務室にしたらどうだ。椅子をエレベータにして、自動で行ったり来たりできるよつにしてやるっか？」

キャゼルなどはからかい半分に提案したもので、これは珍しくヤンの響きを買った。

「止めて下さい。そんな子供向けのアクション・ドラマみたいな仕掛けは、先輩らしくもない」

「案外、乗ってくるんじゃないかと思ったんだがな。まあ、お前の言う通り、馬鹿なことに金銭をかけることもないか」

本気ではなかったらしい。結局、会議室には司令官用のコンソールを追加し、さらに隣室がヤン専用の休息室として改装されることになったのだが、これもまたヤンのしかめ面を招いた。

「なにも仮眠用ベッドとか、シャワー・ルームまで設けることはないじゃないですか」

「執務室とは往復するのも嫌なくせに、自宅となら良いっていうのは矛盾だぞ、ヤン。こつしておけば不眠不休、一四時間戦えるじゃないか。心配するな、食堂への直通回線も引いておいてやったからな」

「……」

「感謝の言葉はどうした？」

「……私は良い先輩を持ちましたよ」  
完全な棒読みだった。

ともあれ、ヤンは作戦会議室に腰を据え、シェーンコップやアツテンポローとともに、彼らの祖国の解体を告げる報道に目を凝らしていたのである。

この時点で、ヤンの手許で動員できる兵力は艦艇で六〇〇隻余りと兵員で二万人弱程度に過ぎない。廃棄されたとは言え十分の補給物資と動力炉を持つダヤン・ハーンであつてみれば、数年の潜伏は可能とは言え、帝国軍に対抗した軍事作成など思いもよらない小勢力というしかなかった。まさに『流亡の私兵集団』以外にどう評しよつもないことを、ヤンは十分すぎるほどに心得ていた。

「笑い事ではありませんぞ、ヤン提督」

シェーンコップが星域図を表示させる。自由惑星同盟の領域が薄青い光の霧で、一方の帝国は赤い光で表示される。帝国本土からは二本の赤い光の柱、イゼルローン回廊とフェザーン回廊が同盟領に突き刺さり、その先端からいびつな赤い光半球が広がっている。バラトの和約による割譲宙域だが、青い光の霧のそこそこに赤紫色の斑点が浮かび上がっている。

「もう、これは沈みかけた船ですな。鼠たちが我がちに逃げださつとして」

シェーンコップは言う。ケリムを代表として、ジャムシード、ルドミラ、ティベステイ、ライガールら、自由惑星同盟から離脱帝国の保護領化への選択を宣言した諸星区である。

「無人とはいえ、ルエヴェトからポレウイトを経てランテマリオ、ガンダルヴァに至る宙域はすでに帝国の管制下に入ったと言つていいでしょう。これに、これらの諸星区を加えれば、帝国はフェザー

ン回廊からハイネセンまで準帝国領だけを通つて侵攻できること  
になります」

「ああ、そうだね。さすがだな」

「感心している場合ですか」

「感心しかできないから感心しているんだが、いけないかな」

軽くシェーンコップの反論を封じておき、ヤンも星域図に見入つた。シェーンコップはしばらくしばらくヤンの反応を伺つていたようだが、ヤンが星域図を凝視したなり沈黙に陥つてしまつと、『ローゼンリッター』  
『薔薇の騎士連隊の訓練について打ち合わせがある』と部屋を後にした。

「さすがだな……」

ランテマリオとバーミリオン、二つの大会戦で同盟軍は強かな打撃を受けた。ヤン自身、バーミリオンに至るまでの陽動作戦で帝国軍の三個艦隊に大損害を与え、バーミリオンでもローエングラム公ラインハルト直率艦隊、ミュラー艦隊、そしてキルヒアイス艦隊に対して、ほぼ致命的と言えるほどの損害を与えた。とは言え、同盟軍の制式艦隊はラインハルトの侵攻時にすでに五個艦隊前後にまでやせ細つており、バーミリオン戦後、同盟軍の手許には辛うじて三個艦隊を編成し得るかどつか程度の艦艇しか残っていない。一方、帝国軍はあれほどの損害を受けてなお優に二〇個艦隊を上回る兵力を擁していたのである。

加えて、既に国力の差も決定的だった。貴族財産の悉くを収公する一方、ラインハルトの許で抜本的な改革が進められた帝国は、『跳躍的』と呼べるほどの国力と国家財政の回復を見せ、同盟との長い戦争での疲弊をすら拭い去つたかに見える。ランテマリオとバーミリオンでの損失が回復されるのも、そう遠い将来ではないだ

るつ。

翻つて同盟は無残極まりない。ヤンはため息をつくしかないほどだ。本来、民主共和制を取る政体は、帝国のような専制国家に比較して生産性ではるかに上回る。自由な競争による生産力向上へのモチベーションが、奴隷的労働による強制的蔓延する専制国家を圧倒するわけで、それゆえに人口約一三〇億の同盟が、一五〇億余の臣民を抱えた帝国に対して国力比四〇対四八を維持し得た。単純に計算すれば、同盟の生産性は帝国のその一・五倍にもなるのだ。同盟が帝国に対してほぼ互角に覇を競い合えた理由がここにある。

しかし、『神々の黄昏』作戦前から数十年、同盟での産業生産性は頭打ちから緩やかな下降に移っていた。国家の予算や投資の配分が硬直化し、バラトを中心とする中枢星区と辺境宙域との経済的格差が固定されたことが決定的だった。閉塞と停滞に絶望した人々が向かつべきフロンティアもまた、辺境宙域の衰退に伴つて失われていき、同盟はかつての地球にも似て、限られた領域の中で互いの取り分を奪い合うだけの、救いのない中世的閉塞のただ中に落ち込んでいたのだ。

加えて、バラトの和約に相前後して帝国がフェザンに命じた、『同盟国債の新規購入の禁止』である。繰り返しになるが、あの命令は同盟にとって強烈なボディー・ブローとなった。艦隊や社会の再建のための新たな投資どころか、帝国の支配下に入ったフェザンの金融資本が国債の借り換えすら渋るようになって、日々の行政のための予算すら事欠く有様となり始めたのだ。致命的だったのは、同盟の政治家の誰一人として、この命令が同盟に及ぼす破壊的な影響に気づいていなかったことだった。

少年時代、商船の船倉に同盟だけでなく、フェザンや帝国の

産物までが載せられているのを目の当たりにして、父タイロンに問うたことがあるのだ。

「政治と軍事の境界は国境まで。人間が住んでいる限り、経済つてやつは境界なしにどんどん広がっていく。で、帝国にも人は住んでいる……そういうとき、ウエンリー」

国力比の話をするれば、フェザンは僅か二〇億の人口で、帝国との国力比は一二対四八。同じ計算を当てはめると、その生産性は同盟の倍、帝国の三倍強に達する。もし、同盟が『経済に国境なし』とばかりに、ヤン・タイロンやフェザン並みに帝国への経済進出を果たしていたら……あるいは既に帝国は同盟の、少なくとも経済的な支配下に入ってしまったかも知れないではないか。

そんな馬鹿なことがあるはずはない……反論はあるだろうが、経済が政治・軍事の境界を乗り越えることなど、人類の歴史上珍しくもないことである。ある国家の指導者の夫人が、交戦中の敵国の産品で身を飾っていたエピソードなど、歴史のページを数ページも繰れば幾らも見出すことができるほどののだ。『敵』を罵倒するマイクヤスビーク、放送装置が『敵国』の生産品であり、彼らの軍隊の装備品がこれもまた『敵国』からのライセンス生産品であったことなども枚挙に暇がない。

「まったく見事だ、皇帝ラインハルト……いや、キルヒアイス帝国大公……かな」

どっちでもいい。ヤンはそう思う。皇帝ラインハルトの発案であるつと、キルヒアイス帝国大公の施策であるつと、既に軍事力で決定的に劣勢となった同盟に止めを刺す上で、あれは最高の手段だった。帝国の命令がフェザンにのみ向いていたこともあるが、言い訳にはならない……とヤンは思う。同盟の政治家は、自らの思

考の硬直性を恥じるべきだろう。少なくともバーラトの和約において、この禁止令の緩和は求めるべきだった。帝国が応じたかどうかは、無論、別の話になるが。

「いっそ、イゼルローン要塞を奪回し、エル・ファシル星系に至る回廊周辺を解放区として、帝国の攻勢に対応しましょう」

アッテンボローの『学生革命家』的な提案は、六月に入ってからエル・ファシル星系がやはり自由惑星同盟からの離脱を宣言したものの、あくまで『議会制民主主義政体を維持する』として、他の星系のように帝国保護領への道を拒否したのを受けてのことだった。刺激を受けたのか、シヴァ、パルメンドらイゼルローン回廊に近い星系がエル・ファシルに追隨する動きを見せているという情報もあった。

「今の所、吾々には六〇〇隻そこそこの兵力しかありませんし、実際、これ以上の兵力を持ったとしても補給が続きませんからね。イゼルローン要塞を手に入れ、エル・ファシルやその周辺星系を後背宙域として確保すれば、この二〇倍や三〇倍の兵力は確保できますし、ヤン提督エル・ファシルにありとなれば、同盟領の全域から提督のもとに集まってくる兵力も期待できます」

「その前に帝国軍に撃破されなければ、だけれどね」

「失望させるようなことを言わないでください。ヤン提督なら、皇帝ラインハルト自身と戦っても勝てると思ってるんですから」  
「信じるのは自由だけど、信じれば想像が現実になるなんて勘違いしないでくれよ、アッテンボロー」

「ご説、胸に刻んでおきますよ」

「まだ、イゼルローンに行くには早すぎる」

「何を待っているんです。待ってたって年金は返っちゃ来ません

よ」

「ハイネセンから離れた時点で年金は諦めているよ」

「そりゃ、そつでしようとも。提督なんかまだ何ヶ月か年金がもらえただけでも良いじゃないですか。提督についてきた連中はみんなもらう前に年金生活なんか夢のまた夢って消え去っちゃまったんですからね。その分の責任はしっかりとつてもらわないと」

「おいおい、そんなことまでわたしに責任を要求しないでくれないか。今は、帝国と同盟の未来のことで手一杯なんだから」

「そうですか、そうは見えませんが……」

「どう見えるんだ？」

「失われた憧れの年金生活への懐旧と哀惜に浸っておられるように見えますけどね」

アッテンボローはにやにや笑いを浮かべながら、行儀悪く司令官席の椅子に片膝を抱え込んだ姿で紅茶を喫しているヤンの姿をためつすがめつ眺めた。紅茶はヤン夫人のフレデリカが淹れたものだが、香りとヤンの様子から判断するところ、それなりに満足のいく出来ではあるようだ。食事の用意の方は相変わらず好不調の波が大きいようだ。幸いにも一行にはキャセルヌ夫人が同行してくれているし、フレデリカも主婦業への専念は断念したようだ。ヤンが栄養失調で倒れる心配だけはなさそうだった。

「そついえば、ユリアンはどうしていますかね？」

「無事さ、決まっているだろう」

「何か、情報が入ったんですか？」

「いや……」

顔をつるりと撫で、ヤンは紅茶の最後の一口を咽喉に滑り込ませた。アッテンボローの見立て通り、ユリアンには及ばぬものの、

香り、味共に彼の味覚を満足させるレベルにはどうやら達しているが、それだけに地球へ旅立って既に半年近い亜麻色の髪の少年……というより既に青年の年齢に達していたが……が思い出されてならなかった。

「何もないが、ユリアンのことさ、無事であるに決まってる」

この時点でヤンはまだ知らないことだったが、ユリアンが地球教本部への潜入に成功し、一度は危機に陥ったものの、ワーレン艦隊の来襲を奇禍として地球教の正体につながる貴重な情報を持ちだしていたことは史実の記す通りである。持ち出された情報が、この先、ヤンやユリアン、ひいてはラインハルトやキルヒアイスの運命にどのような影響を与えることになるのか、それはまだ語るべき時ではないのだが。

「……そうだ、忘れるところだった。サインをお願いします」

アッテンポローが差し出したのは、巡航艦『ハリファックス』

艦長の任命辞令だった。

「グレーチェン・ヘルクスハイム大尉？……あの、元気の良いお嬢さんか」

『ハリファックス』はヤンのバート脱出時に偶然行き会った、テルヌーゼン泊地でのモスボール化予定の艦隊の内の一艦だった。戦闘や演習ではなく、単なる移送航行だったため艦長も予備役の老大尉だった。他の多くの艦が同様の状況にあり、艦隊運用の責を担うアッテンポローとしては、まずは艦艇レベルでの指揮運用能力向上に意を払わざるを得ないところだった。

「これは現職の希望でもありません。年齢的に苛烈な戦闘には耐えられそうにない、前線への補給任務で役に立ちたいと言っています」

「で、ヘルクスハイム大尉の方は？」

「やる気満々と言ったところですね。彼女は実績もありますし、何とつかちょっとしたカリスマというか、自然と人がついていくようなところがありますから。まあ、皇帝ラインハルトみたいに圧倒的なオーラってんじゃないですがね。例の彗星の戦いでは、これももう立派な艦隊レベルの指揮能力を証明しています。今更、巡航艦一隻の艦長でもないような気がしますが、いきなり大佐や准将ってわけにもいかんでしょう」

「皇帝ラインハルトは二〇歳でもう二万隻の艦隊を率いていたよ。年齢で能力を測るのはどうかな」

「アスターテ……ですか」

ヤンが初めてラインハルトと見えた戦いの名を上げ、アッテンポローは軽く唸った。

「まあ、彼女がもう一人の皇帝だったとすれば、放っておいても頭角は現すでしょうしね」

「そうなら私が随分と楽ができることになるんだが……」

「彼女が生き延びたら、戦艦の艦長間違いないでしょうし、うまくすればフィッシャーの小父さんの跡継ぎになってくれると踏んできます」

「彼女も年金生活を棒に振った口だね」

やれやれという口調だった。一口に二万人弱という。ラインハルト・フォン・ローエングラム、あの壮麗にして華麗なる軍事の天才を相手に、二万の人生と未来、それらに責任を取らねばならないというのは些か身に余る重荷と言っべきだろう。もっとも、彼ら全員に『私が全責任を負う。黙ってついてこい』などと啖呵を切るつもりなど、ヤンには全くない。啖呵を切ったところで、シエーンコップなどは、似合わぬことをなさるもんじゃありませんなど、擲

「愉するだけだろっし、キャゼル又あたりなら」馬鹿やってないで、仕事しろ、仕事』というあたりか。

「まあ、強いられてのことはありませんからね。自ら選び取った選択肢です。提督が何もかも背負い込む必要はないと思います」

「別に責任は感じていないさ、特にアッテンボロー、きみとか、シエーンコップとか。伊達と酔狂で騒動を面白がってるような連中に責任を感じる謂われはないからね」

それはどうも……苦笑いしつつ、アッテンボローは引き下がった。

その背を見送って、ヤンは再び一人思い沈んだ。アッテンボローの言いつ通り、イゼルローン要塞を奪回し、エル・ファシルに根拠地を置いてヤンがその所在を明らかにすれば、エル・ファシルに呼応する星区も現れよう。ヤンの旗幟の許に馳せ参じる現役・予備役の軍人も多数に上るかも知れない。だが、それは同時に帝国軍の耳目をエル・ファシルとイゼルローンに集中させ、皇帝ラインハルトの激発と電撃的な侵攻を誘う結果になるに違いない。エル・ファシルには帝国軍を防ぎ止める要塞はなく、必然的に要塞に立てこもっての防禦戦となるが、効果的な要塞戦闘を繰り広げるには、少なくとも旧ヤン艦隊程度の兵力が必要となる。まして、今回は回廊の両側からの攻撃を想定しなければならぬのだ。

そして、皇帝ラインハルトが、迎撃に十分な兵力を蓄えるだけの時間を与えることもあり得ない。ヤンと互角の兵力で対峙することへの、ある意味での流血のロマンティシズムとは必ずしも無縁でないにしても、用兵者としてのラインハルトの合理性がそつした無用のロマンティシズムを凌駕することをヤンは欠片ほども疑っていなかったたのである。

それにヤンの望みは……要すれば、帝国と同盟、というよりも皇帝専制と民主共和主義、複数の政治体制の共存である。別に帝国を倒す必要もないし、人類社会全体が民主共和主義を奉じねばならない絶対的な法則が宇宙を支配しているわけではない。ヤンは、かつてラインハルトの前でも口にした通り、複数の選択肢があり、それを人々が選び取り得る自由を確保したい。宇宙に於いて複数の政治体制の並立が許されること、それに尽きると言って良い。

やはりキルヒアイス帝国大公か……イゼルローンを奪取すると同時にキルヒアイスに接触し、何らかの交換条件、イゼルローン要塞の返還でも良いし、これは余りやりたくはないがヤン自身が帝国に人質として赴くというのでも良い。生命まで奪られるのは困るが……ともかく、どれほど細やかであっても民主共和制の種子の保存のためには皇帝ラインハルトという壮麗なゴールに達せねばならず、そのための関門こそキルヒアイス帝国大公なのではないか。ただ、その関門を開くのは容易ではない。優しげで大人しやかに見えて、あの赤毛の名将に首を縦に振らせるためには、彼が納得するだけの条件を示さねばならない。

単純な利害で動く人物でないことは確かだった。絶対に譲れない価値に関わる条件を提示しない限り、キルヒアイスは動くまい。イゼルローン要塞を返すから……と申し出れば、『ありがとっ、要塞は貰っておきますが、これはもともと帝国のもんですから』とでも切り返されそうだった。そのキルヒアイスが同盟、あるいはヤンとの全面的な軍事対決は可能な限り避けようとしている。そのあたりに何らかの鍵はないだろうか。

あることに思い当たり、ヤンは眉を寄せた。

前提条件を整えるための軍事作戦はやむを得ないとしても、軍

事的に決定的な勝利の後には、可能な限り流血を避けるよう、同盟を経済的に徐々に締め上げ、内部から分裂させて最終的に帝国に併呑する。構想の確実さ、堅牢さは端倪すべからざるものではあるとしても、皇帝ラインハルトの為人には相応しくない。

「あるいは、キルヒアイス帝国大公はこれ以上、皇帝に戦争をさせたくないのかも知れないな」

他者に、たとえばアッテンポローあたりには正面から問われれば、明快な根拠は示せまいが、ヤンは自分が誤っているとは思えなかった。これまでの対同盟外交がキルヒアイスの主導で為されているとすれば、彼の狙いは自然な形で政策に現れてくる。バーラトの和約を始めとして、その後の帝国の政策は悉くが正面からの戦いへの回避を示していないか。

「回避じゃないな」

無論、キルヒアイスが主導したとしても、帝国の頂点に立つのがラインハルトである以上、ラインハルトもまたキルヒアイスの考えを良しと判断し、許可し推進せしめるだけの度量を示したものだ。そう判断しても良いだろうが、いずれにしても、キルヒアイス帝国大公という難解な関門に対する鍵として、これが手掛かりはならないだろうか。

ヤンは顔を上げ、今は主婦の立場からもとの副官としての任務に戻っている、彼の妻を呼び出した。

手が空き次第に作戦会議室に行くように。ヤン提督が聞きたいことがあると言っているのだ。フレデリカからの連絡を、グレーチェンはさして疑念も持たずに受けとった。バーミリオン会戦の前にはローエングラム公ラインハルトのことについて知る限りのこ

とを語ったが、ジークフリード・キルヒアイスについては余り語るものがなかった。

「ヘルクスハイム大尉！」

作戦会議室に向かう途中、こちらは作戦会議室から下がってきたらしいアッテンポローに呼ばれた。

「どこへ行くんだ？」

「作戦会議室です、閣下。ヤン提督がお呼びだというので」

「ああ、また何か思いついたかな。ああ、『ハリファックス』、貴官に任せる。ヤン提督の許可も頂いた。航海士にセーデル中尉、電子戦士官にヴァイラルド・ウアン中尉、先任下士官にコティ兵曹をつけてやる」

「感謝します、閣下！」

「頼むぜ、おい」

グレーチェンの肩を軽くぽんと叩くとアッテンポローはそのまま通路を逆方向に姿を消す。入れ替わるように現れたのはベンドリングだった。その姿を目にして、グレーチェンは心臓が軽くとんと音を立てて跳ね、自然に頬が軽く上気するのを感じた。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ、そなたも呼ばれたのか？」

「ええ。まあ、何を訊かれるのかは大体予想は付きますが」

ベンドリングに伴われて同盟に亡命して、もう七年余りになる。逆に言つとまだ七年しか経っていないのかと思われるほど、亡命以来のグレーチェンとベンドリングの日々は多事多端だった。ジークフリード・キルヒアイスに想いを寄せるの余り、亡命と同時に軍人への道を歩んだグレーチェンに対して、ベンドリングが軍務への意思があったとは思われない。最初は軍囑託の少佐待遇に過ぎなかったものが、運命のいたずらに翻弄されるがままに正式の少佐として

統合作戦本部情報部で帝国情報分析の任に就き、気づけば情報部長代行の肩書きを帯びていた。さらにパーミリオン会戦前後のドタバタで同盟軍の人材が払底する中、肩書きから代行が外れ、階級も帝国軍時代を上回って大佐の肩章を帯びるまでになっていた。

同盟軍の中で累進したとは言え、ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングの忠誠がひとえに自分へのみ向けられてきたことを、グレイチェンは痛いほど感じているし、この人物を後見人として与えてくれた幸運には感謝する以外にないと思っている。実際、ベンドリングに何度、生命の危機を救われたことが。彼の存在がなかったら、今頃、グレイチェン・ヘルクスハイムという人間はこの世に存在していなかったに違いないのだ。

「悪いね、忙しいところを」  
見慣れた、収まりの悪い黒髪と黒い瞳の、一向に軍人に見えない人物が二人を迎えてくれた。

「とんでもないです、閣下」  
「多分、予想は付いているとは思いますが、ちょっと聞かせてくれないかな、ジークフリード・キルヒアイス帝国大公のことだ」

やはりその件が、グレイチェンはベンドリングと目を見交わし、頷いた。

「わたしの……いえ、小官の分かる限りのことをお話しします。何でもお尋ね下さい」

亡命の際、彼らと行を共にしたのは数日に過ぎなかったから、ラインハルトに関する時と同様、話すべきことはさして多くなかった。ただ、グレイチェンはパーミリオンでの負傷加療中にキルヒアイスと再会しており、その時の彼に関する記憶は新しい。ただ、ひどく話しづらかった。

「……その、つまり、わたし……小官は、そのキルヒアイス提督が、その……好きで、その……」

求愛したが、キルヒアイスには「すでに思い定めた人がいる」と拒まれたと語ったとき、グレイチェンは耳朶まで真っ赤になっていた。まして「たとえ一夜のことでもよい。わたしを女子<sup>おなご</sup>として幸してくれることも、叶わぬのか」などと口走ってしまったことなど赤面を通り越して顔面から火が出そうだった。

「……その相手が、皇帝ラインハルトの姉君のグリューネワルト伯爵夫人、いまは大公妃の称号を帯びておられるようですが、そのグリューネワルト大公妃……確か名はアンネローゼと申されたと思います」

「皇帝ラインハルトの姉君……グリューネワルト大公妃アンネローゼ……ね」

「ええ、キルヒアイス提督はこうも言いました。彼にとつて、ラインハルトという人は自分の半身のようなものだ。決して失うことはできない……と」

「なるほど……これは仮定の質問だから、想像の範囲で答えてくれて良いが、同盟との戦いが続くことが皇帝ラインハルトにとつて良くないこと。キルヒアイス帝国大公がそう判断するとすれば、それはどんな時だろうか？」

「戦いが皇帝の心身を毒すると判断したとき、だと思えます、提督」  
グレイチェンの回答に躊躇いはなかった。

「戦いは劇薬のようなもの。ジークフリード・キルヒアイスは戦いの功罪を十分心得ている人物です。彼の目には、戦争とは絶大な効用と恐るべき副作用を兼ね備えた、極めて扱いの難しい劇薬のように映っているのだと。彼にとつて『半身』の皇帝が、そんな劇薬を

取り過ぎることを、彼が警戒していたとしても何の不思議もありません」

「劇薬……確かに劇薬だね。そうか、キルヒアイス帝国大公は皇帝と戦いのことをそんな風に考えるかも知れないのか」

グレーチェンはかなり躊躇ってから言葉が続けた。ジークフリード・キルヒアイスが戦いを毒と判断するとすれば、その戦いが皇帝ラインハルトにとって守りの戦いである場合ではないか。これまでラインハルトとキルヒアイスはまっしぐらに帝国、そして人類の頂点を目指して戦ってきた。戦い勝ち取るための戦いであるからこそ、ラインハルトは『その為人、戦いを嗜む』と言われるまでに戦いの場に赴き続けた。二〇代にして帝位に就いた今、人の平均的な寿命で言えば、ラインハルトはなお数十年、皇帝として玉座に君臨することになる。古代の霸王の言にもある。王と言ひ皇帝といふ、その職責は国家という庭を不断に見張り続け、這い込もうとする害獣や雑草を取り除くことに他ならない。誰にもその責を預けることも叶わず、勝ち得る喜びに代わってひたすら守り続ける、耐えがたい重荷をただ一人、生涯にわたって負い続けるようなものだ。」「同盟との新たな戦いがそれに当たるかどうかは分かりません。

ジークフリード・キルヒアイスの為人として、そう考えるかも知れない。私……小官にはそう思えます。ただ、そうであったとしても、やはり皇帝ラインハルトが戦いを嗜む人であることに変わりはないと思います」

皇帝の視野に入るための道は、戦いの向こうにしかない。キルヒアイスですら、戦いの野を避けて、他者を皇帝の眼前に導くことはできないのではないか。矛盾するようだが、皇帝ラインハルトの帝国と新たな和を結ぶには、戦いを避けて通ることはできないかも

しれない。

ヤンの黒い瞳がにわかに透明度を増し、底知れぬ湖水を思わせて透き通るような錯覚をグレーチェンは覚えた。何かしら人ならぬ者の瞳の奥底、その奥には見ではならぬ禁忌の異世界が広がっているのではないか。あらぬ妄想に駆られグレーチェンが身震いしたときには、ヤンの表情は既にいつもの穏やかな、一向に芽の出ない若手字者のようなそれに戻っていた。

「一つ、気になることがあります」

ベンドリングが沈黙を破った。未確認情報なので、無条件に信じて頂くわけにはいきませんが……前置いて、ここ二、三ヶ月、国内で『皇帝陛下、静養』を報じる報道が頻度を増している。

「同盟を軍事的に降し、新たに帝位に就いた。一つ節目がついたところで一旦休息を取る。あり得そうですが、私の知るラインハルト・フォン・ミューゼルには馴染みません。あるいはキルヒアイス帝国大公が皇帝の健康に不安を持っていて、基本的な方針として同盟との全面戦争の再開は回避すると決めている……これも完全に屋上屋を架するような仮説でしかありませんが」

「分かった。それも可能性の一つとして上げておくことにするよ。忙しいところをありがとう。後からでも良い、彼らについて思い出したり思いついたことがあったら知らせてくれるとありがたいな」肩を並べて退出しながら、グレーチェンはベンドリングの背に声をかけた。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ……その、わたしがジークフリードに、その言った言葉だが……」

「一夜で良い……の一言ですか？」

ベンドリングが振り向く。いつに代わらぬ後見人の温顔だった

が、グレーチエンはまともに視線を合わせる事ができない。

「あ……ああ……あの時は、夢中で……」

「分かっていますよ、グレートヒエン。あなたがどれほどジークフリード・キルヒアイスに焦がれていたか。七年、一緒にいたんです。

私の目はそんなに節穴ではありません……と、これは何度も申し上げましたね」

「す……済まない」

「どつして私に謝るんです」

ベンドリングの声は笑いを含んでいた。明らかにグレーチエンの困惑を楽しんでいるのだが、グレーチエンとしては羞恥と困惑が怒りを上回ってしまい、言葉を選ぶ余裕すらないのだ。

「では、本心ではなかったと？」

「それは……」

首筋まで真っ赤になって、グレーチエンは視線を通路の舗面に落とした。本心だった。本気でそれでも良い、とあの時は思っていた。

不意に肩を抱かれ、グレーチエンはびっくりして顔を上げる。

その唇を、ベンドリングの唇が素早く塞いだ。一瞬抗いかけ、グレーチエンは身体から力を抜く。何故か、これが自分たちの当然のあるべき姿であるかのような、そんな気がしてグレーチエンから抵抗の力を奪ったのだ。

さして長い時間ではなかった。軽く肩を押され、グレーチエンは信じ難いことが起きたような、彼女らしくもなく半ば呆然として右手指で自分の唇に触れていた。

「ジークフリード・キルヒアイスが相手ならやむを得ないと思っていましたし、あなたがどれだけ本気だったかも知っていました……

でも……」

微笑い、ベンドリングは鮮やかな敬礼で表情を隠した。

「彼以外には譲りません」

身を翻し、足早に立ち去っていく後見人の背に、グレーチエンは頭の中が真っ白になったような感覚に呆然と立ち竦んだ。

「あ……」

不意に理解が生じ、視界に色彩が戻ってくる。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ、ヴェンツェル・ハインリッヒ、譲らないって何をだ、一体誰に何を譲らないって言ったんだ。待って待ってくれ、ヴェンツェル・ハインリッヒ！」

応えはない。グレーチエンは小さく地団駄を踏み、ちょうど通りかかった女性下士官の視線に気づいて慌てて音量を押さえ込む。

「ヴェンツェル・ハインリッヒのばかっ!!」

薄く淹れた紅茶色の髪、青紫の清映な瞳が印象的な女性士官……グレーチエンよりもまだ年下、一五六歳の少女に見えたが、肩章は空戦隊伍長だった……が軽く目を睨って敬礼してくるのに、グレーチエンは答礼を返すのがやっとで、その視線が明らかに奇異なものを見るものであることには気づかない。それが、顔から耳朶、首筋まで桜色に上気させている女性大尉への好奇の視線であることにも、グレーチエンはついに気づかなかった。

「何よ、あれ」

慌てふためいて……と彼女の目には映った……彼女に答礼を返した、淡い金髪の女性士官の背を見送った、カリンことカーテローゼ・フォン・クロイツェルの唇から低い呟きが漏れた。彼女の視野

に映ったのは、大佐肩章をつけた男性士官が不意にその女性士官を抱きしめて強引に唇を合わせたシーンだった。

「こんなところで女を口説くなんて最っ低！」

係累の一切がないとして『動くシャーウッドの森』に志願したときには、当分の間、父親の噂すら聞かずに済むと思っていた。

兵士たちの噂の中、血統上の父親であるあの男の愛人の名が長大なりストとなって伝えられていくのを耳にするのが苦痛でならなかった。どのような事情があるにしても、母エリザベート・ローザラインがあの男の愛人の一人となった結果が自分だという事実が、カリンには耐えられなかったのだ。

にもかかわらず、彼女の血統上の父親はヤン提督と共に不意に、この根拠地に、つまりは彼女の面前に現れた。それだけでも十分に気鬱なのに、こともあろうに他の士官の『ナンパ』シーンを目の当たりにさせられ、カリンは不快と嫌悪のカクテルをグラス一杯に仰がされたような気分だった。

女性士官の方は直接の面識はなかったが、『彗星の戦い』は同盟軍内でも十分すぎるほど喧伝されている。同盟軍将兵では彼女を知らない方が不思議だった。カリンと幾つも違わない歳で、帝国軍に泡を吹かせるほどの女性が、どういっわけかあっさりとの大佐の口づけを受け入れてしまっていたことが不快の上に不審と不満を塗り重ねた。

「ヘルクスハイム大尉もヘルクスハイム大尉よ。横っ面ひっぱたいてやれば良かったのに、あんな軟弱なやつ！」

数ヶ月前に別の人物を評したのと同じ言葉を、カリンは吐き捨てた。

## 第二章 戦野

宇宙暦八〇〇年、新帝国暦一年五月。自由惑星同盟首都ハイネセンは混乱の極にある。ヤン・ウェンリーが政府の謀殺の手を逃れて宇宙の深淵へと逃げ込んだあと、事態を察したシユタインメツ艦隊が衛星軌道に侵入、同盟政府に対して『事態の説明』を求め、同盟政府が『説明』に窮した経緯はすでに述べた通りである。

同盟政府にしてみれば、ヤンを謀殺しようとした挙げ句にシエンコップらの薔薇の騎士連隊に反撃を受けてレベロ議長を拉致され、そのレベロが彼らに対してレンネンカンブの誘拐を黙認引き替えに我が身の自由を得るなどと言つ裏取引の上で、ヤンの逃亡を認めた……など帝国に対して説明のしようがあるはずもなかった。

「あざとい謀略と仰るが、小官はあくまで提案しただけであり、採用なさったのはあくまで議長閣下であります。小官に言わせて頂ければ、実施に於いて不備がありすぎたと申し上げるべきでしょうな。」

そもその混迷の原因となったヤンの謀殺、その最初の提案者であったはずのロックウェル大將は、責任を問つてレベロに対して厳格な無表情さを僅かも動かさなかった。

「私は一介のブレインに過ぎませんが、今更私の責任を問つたなどと言われても……むしろ、薔薇の騎士連隊どもの無法な復讐への護衛をお願いします。もし、私の生命や資産に何かあった場合は、閣

下の政治責任を大いに問わせて頂きますからな。」

機会を捉えてのヤン一党の一網打尽と抹殺を示唆した、国立自治大学のオリベイラ学長も、責任逃れと脅迫とを緋い交ぜに逆にレベロの不手際を責めるばかりであり、レベロは軍もブレインも事態を打開する上で何の助けにもならぬことを思い知らされるばかりだった。

さらにレベロを不安に陥れたのは、『皇帝ラインハルト暗殺未遂犯』の逃亡だった。逃亡犯の名はグレーチェン・ヘルクスハイム同盟軍大尉。帝国軍による同盟領侵攻作戦<sup>プロクナロック</sup>神々の黄昏<sup>グッドモーニング</sup>開始直前、同盟に亡命していたゴルデンバウム王朝最後の皇帝『エルウィン・ヨーゼフ二世』は帝国の要求に従つて、フェザンへ赴いた。その時、ラインハルトとの会見場である帝国軍旗艦『ブリュンヒルト』まで皇帝に付き添ったのが、ヘルクスハイム大尉だった。

爆発が起きたのはまさにその会見の場であり、どのような手段に拠つてか、皇帝が『人間爆弾』に仕立て上げられていたものと推測された。誰が、どのような意図を以て事件を起こしたのかは不明だが、犯罪によつて最大の利益を得るものが犯人であるとすれば、この時点の宇宙でラインハルトの死を最も望んでいたのは、まさにこの黄金の有翼獅子にのど笛を噛み千切られようとしている自由惑星同盟以外にあり得なかった。

レベロは同盟政府が無実であることを知っている。しかし、第三者的な視点から言えば、動機・手段・結果による利益、いずれを取つてみても最有力の容疑者として糾弾されるべきが彼の政府であることに反論の術はなかった。

帝国が、なぜグレーチェン・ヘルクスハイムという一介の女性士官に興味を示し、ヤンの逮捕勧告と同時にその身柄の引き渡し

を求めてきたとき、不断の重圧を前に平衡を崩しかけていたレベロの精神は、帝国軍が彼女を『皇帝暗殺未遂事件』の犯人と目しているとの判断に傾いてしまったのである。ヤンを逃しても、『皇帝暗殺未遂事件』犯を押さえる。逆に、『皇帝暗殺未遂事件』犯に逃亡を許しても、ヤンを確保できれば、いずれにしても同盟への再侵攻への口実となる。レベロは、奇妙に歪んだ視野の捕らえた風景を真実と信じ込み、ヤンとヘルクスハイム大尉、二人ながらの謀殺を実行に移した。

結果としては完全な失敗。ヤンばかりか、どうやらヘルクスハイム大尉までが、その後見役のベンドリング大佐とともにヤン一党に身を投じ、ハイネセンから脱出してしまったらしい。報告を受けたレベロの視野が一瞬のうちに空白に変じたのも無理からぬことだった。

「統合作戦本部情報部長だったというのか？」

ヘルクスハイム大尉の後見人の経歴は、レベロが感じたのは怒りではなく、絶望と自失だった。

「なぜ、亡命者などをそんな枢要の地位に就けたのだ？」

ベンドリングの失踪が引き金のよつに、統合作戦本部の各部署でも無断欠勤者や病欠者が続出。その大半が、あるいは家族もろとも、あるいは妻子を半年以上も前に出身星系に転居させた上で消息を絶つたことも間もなく明らかになった。甚だしきはロックウエル大将の次席副官までが事件後直ぐに行方を眩ませたばかりか、空席はさらにはレベロやその他主要閣僚の秘書スタッフにまで及んでいたのである。彼らがヤン一派、もしくはベンドリングに密かに情報を通し、彼らがハイネセンを立ち去るのと相前後して、自らの安全を求めて失踪したのは明らかだった。

「ヤン元帥と面会させよ、レンネンカンフ高等弁務官の所在を明らかにし、その身柄を直ちに保護せよ」

シュタインメッツからの要求は連日のように同盟政府の聴覚を叩き続けたが、レベロに答えるすべのある筈もなかった。さらに帝都での決定を受け、シュタインメッツは同盟政府に新たな要求を突きつける。

「五月末までに同盟政府による経緯の詳細な説明と、ヤン元帥と本職の会見が実現されなければ、帝国は同盟政府にパーラトの和約遵守意思なしと見なして同和約を廃し、帝国による行動の自由を宣言するものである」

最高評議会の議場のスクリーンの中、シュタインメッツはそう宣言し、レベロらの応答を待たずに通話を遮断する。

暗転したスクリーンを前に、議場に残された同盟最高評議会のメンバーは白茶け、能面さながらに硬直して表情を失った顔を見合わせ、交わす言葉すらなかつた。呼吸さえ忘れ去られたように静まりかえる議場の中、誰もが席を立つ気力も失い、力なく座席に身を埋めたまま身じろぎもしなかつた。

「シュタインメッツ提督の宣言は、二五〇年の余を閲した自由惑星同盟の死亡宣告だった」

ある歴史家が評したように、シュタインメッツの最後通牒は、既に崩壊と分裂への坂道に足を踏み入れていた同盟の背に強かな一撃を加えたも同然だった。

時は前後するものの、五月一日にはケリム星区が、星区選出の評議員コーネリア・ウィンザーの名で同盟からの離脱を宣言し、帝国の保護下に入る旨を宣言している。

「帝国の了解のもと、本星区の帝国への帰属可否を住民投票に問います。同盟政府がもはや統治能力を失い、私たちに安全を保証できない以上、私は市民のために最善と思われる策を採るべき時と信じます」

ウィンザー女史の提案は、熱狂的と言わぬまでも一部の熱心な多数の消極的な人々によって支持された。ウィンザーはさらに、自らへの星区政府主席代行就任を要求し、星区政府がこれを拒否すると、街頭で彼女の支持者たちに訴えかけた。

「いまこそ強力な指導力のもと、この星区を挙げての体制で帝国との共存、さらには将来的な帝国への帰属の道を歩まなければ、ケリムは自由惑星同盟とともに宇宙から消滅の非命を受けることとなるでしょう。帝国は、バラトの和約を廃し、再度の軍事侵攻を宣言しました。同盟軍に過去の力はなく、ヤン・ウエンリーですら見捨てた同盟政府が、皇帝ラインハルトの親征の前に、同盟と呼ばれていた何もかを残すことができるはずはありません。今、優柔不断の、衆愚の病に冒された政府に取って代わり、私たちの私たちによる私たちのための政府を樹立すべき時が来たのです。真にケリムを憂える人々よ、私に続いて下さい！」

「まったく小トリユーニヒトそのものですね。あの女に、あれだけの煽動の弁舌が振るえるとは思ってもみませんでしたな」

「人は見かけによらぬものっていうのかね」

ウィンザーの演説を、ヤンが目にしたのはポリスーン星系のダヤン・ハーン。廃された旧補給基地の旧大会議室が、作戦会議室として使えるよう、情報・通信・航路等の表示スクリーンと端末が備

えられている。メルカツが、『動くシャワーウツドの森』を率いてこの基地に入った時に改装されたもので、合流して以来、ヤンの居所になっている。司令官執務室を別に設ける案も出たが、ヤンはあつさり却下した。

「ここを使うから良い。わざわざ別室に部屋を設けたんじゃ、一々ここへ歩いてこなければならぬだろう」

「歩くのが嫌なら、この上の部屋を執務室にしたらどうだ。椅子をエレベータにして、自動で行ったり来たりできるよつにしてやるっか？」

キャゼルなどはからかい半分に提案したもので、これは珍しくヤンの響きを買った。

「止めて下さい。そんな子供向けのアクション・ドラマみたいな仕掛けは、先輩らしくもない」

「案外、乗ってくるんじゃないかと思ったんだがな。まあ、お前の言う通り、馬鹿なことに金銭をかけることもないか」

本気ではなかったらしい。結局、会議室には司令官用のコンソールを追加し、さらに隣室がヤン専用の休息室として改装されることになったのだが、これもまたヤンのしかめ面を招いた。

「なにも仮眠用ベッドとか、シャワー・ルームまで設けることはないじゃないですか」

「執務室とは往復するのも嫌なくせに、自宅となら良いっていうのは矛盾だぞ、ヤン。こつしておけば不眠不休、一四時間戦えるじゃないか。心配するな、食堂への直通回線も引いておいてやったからな」

「……」

「感謝の言葉はどうした？」

「……私は良い先輩を持ちましたよ」  
完全な棒読みだった。

ともあれ、ヤンは作戦会議室に腰を据え、シェーンコップやアツテンポローとともに、彼らの祖国の解体を告げる報道に目を凝らしていたのである。

この時点で、ヤンの手許で動員できる兵力は艦艇で六〇〇隻余りと兵員で二万人弱程度に過ぎない。廃棄されたとは言え十分の補給物資と動力炉を持つダヤン・ハーンであってみれば、数年の潜伏は可能とは言え、帝国軍に対抗した軍事作成など思いもよらない小勢力というしかなかった。まさに『流亡の私兵集団』以外にどう評しよつもないことを、ヤンは十分すぎるほどに心得ていた。

「笑い事ではありませんぞ、ヤン提督」

シェーンコップが星域図を表示させる。自由惑星同盟の領域が薄青い光の霧で、一方の帝国は赤い光で表示される。帝国本土からは二本の赤い光の柱、イゼルローン回廊とフェザーン回廊が同盟領に突き刺さり、その先端からいびつな赤い光半球が広がっている。バラトの和約による割譲宙域だが、青い光の霧のそこそこに赤紫色の斑点が浮かび上がっている。

「もう、これは沈みかけた船ですな。鼠たちが我がちに逃げだそうとしてる」

シェーンコップは言う。ケリムを代表として、ジャムシード、ルドミラ、ティベステイ、ライガールら、自由惑星同盟から離脱帝国の保護領化への選択を宣言した諸星区である。

「無人とはいえ、ルエヴェトからポレウイトを経てランテマリオ、ガンダルヴァに至る宙域はすでに帝国の管制下に入ったと言っただけでしょう。これに、これらの諸星区を加えれば、帝国はフェザー

ン回廊からハイネセンまで準帝国領だけを通って侵攻できることになりませう」

「ああ、そうだね。さすがだな」

「感心している場合ですか」

「感心しかできないから感心しているんだが、いけないかな」

軽くシェーンコップの反論を封じておき、ヤンも星域図に見入った。シェーンコップはしばらくしばらくヤンの反応を伺っていたようだが、ヤンが星域図を凝視したなり沈黙に陥ってしまつたと、『ローゼンリッター』  
『薔薇の騎士連隊の訓練について打ち合わせがある』と部屋を後にした。

「さすがだな……」

ランテマリオとバーミリオン、二つの大会戦で同盟軍は強かな打撃を受けた。ヤン自身、バーミリオンに至るまでの陽動作戦で帝国軍の三個艦隊に大損害を与え、バーミリオンでもローエングラム公ラインハルト直率艦隊、ミュラー艦隊、そしてキルヒアイス艦隊に対して、ほぼ致命的と言えるほどの損害を与えた。とは言え、同盟軍の制式艦隊はラインハルトの侵攻時にすでに五個艦隊前後にまでやせ細っており、バーミリオン戦後、同盟軍の手許には辛うじて三個艦隊を編成し得るかどつか程度の艦艇しか残っていない。一方、帝国軍はあれほどの損害を受けてなお優に二〇個艦隊を上回る兵力を擁していたのである。

加えて、既に国力の差も決定的だった。貴族財産の悉くを収公する一方、ラインハルトの許で抜本的な改革が進められた帝国は、『跳躍的』と呼べるほどの国力と国家財政の回復を見せ、同盟との長い戦争での疲弊をすら拭い去ったかに見える。ランテマリオとバーミリオンでの損失が回復されるのも、そう遠い将来ではないだ

るつ。

翻つて同盟は無残極まりない。ヤンはため息をつくしかないほどだ。本来、民主共和制を取る政体は、帝国のような専制国家に比較して生産性ではるかに上回る。自由な競争による生産力向上へのモチベーションが、奴隷的労働による強制的蔓延する専制国家を圧倒するわけで、それゆえに人口約一三〇億の同盟が、一五〇億余の臣民を抱えた帝国に対して国力比四〇対四八を維持し得た。単純に計算すれば、同盟の生産性は帝国のその一・五倍にもなるのだ。同盟が帝国に対してほぼ互角に覇を競い合えた理由がここにある。

しかし、『神々の黄昏』作戦前から数十年、同盟での産業生産性は頭打ちから緩やかな下降に移っていた。国家の予算や投資の配分が硬直化し、バラトを中心とする中枢星区と辺境宙域との経済的格差が固定されたことが決定的だった。閉塞と停滞に絶望した人々が向かつべきフロンティアもまた、辺境宙域の衰退に伴つて失われていき、同盟はかつての地球にも似て、限られた領域の中で互いの取り分を奪い合うだけの、救いのない中世的閉塞のただ中に落ち込んでいたのだ。

加えて、バラトの和約に相前後して帝国がフェザンに命じた、『同盟国債の新規購入の禁止』である。繰り返しになるが、あの命令は同盟にとって強烈なボディー・ブローとなった。艦隊や社会の再建のための新たな投資どころか、帝国の支配下に入ったフェザンの金融資本が国債の借り換えすら渋るようになって、日々の行政のための予算すら事欠く有様となり始めたのだ。致命的だったのは、同盟の政治家の誰一人として、この命令が同盟に及ぼす破壊的な影響に気づいていなかったことだった。

少年時代、商船の船倉に同盟だけでなく、フェザンや帝国の

産物までが載せられているのを目の当たりにして、父タイロンに問うたことがあるのだ。

「政治と軍事の境界は国境まで。人間が住んでいる限り、経済つてやつは境界なしにどんどん広がっていく。で、帝国にも人は住んでいる……そういうとき、ウエンリー」

国力比の話をするれば、フェザンは僅か二〇億の人口で、帝国との国力比は一二対四八。同じ計算を当てはめると、その生産性は同盟の倍、帝国の三倍強に達する。もし、同盟が『経済に国境なし』とばかりに、ヤン・タイロンやフェザン並みに帝国への経済進出を果たしていたら……あるいは既に帝国は同盟の、少なくとも経済的な支配下に入ってしまったかも知れないではないか。

そんな馬鹿なことがあるはずはない……反論はあるだろうが、経済が政治・軍事の境界を乗り越えることなど、人類の歴史上珍しくもないことである。ある国家の指導者の夫人が、交戦中の敵国の産品で身を飾っていたエピソードなど、歴史のページを数ページも繰れば幾らも見出すことができるほどののだ。『敵』を罵倒するマイクヤスビーク、放送装置が『敵国』の生産品であり、彼らの軍隊の装備品がこれもまた『敵国』からのライセンス生産品であったことなども枚挙に暇がない。

「まったく見事だ、皇帝ラインハルト……いや、キルヒアイス帝国大公……かな」

どっちでもいい。ヤンはそう思う。皇帝ラインハルトの発案であるつと、キルヒアイス帝国大公の施策であるつと、既に軍事力で決定的に劣勢となった同盟に止めを刺す上で、あれは最高の手段だった。帝国の命令がフェザンにのみ向いていたこともあるが、言い訳にはならない……とヤンは思う。同盟の政治家は、自らの思

考の硬直性を恥じるべきだろつ。少なくともバーラトの和約において、この禁止令の緩和は求めるべきだった。帝国が応じたかどうかは、無論、別の話になるが。

「いっそ、イゼルローン要塞を奪回し、エル・ファシル星系に至る回廊周辺を解放区として、帝国の攻勢に対応しましょう」

アッテンボローの『学生革命家』的な提案は、六月に入ってからエル・ファシル星系がやはり自由惑星同盟からの離脱を宣言したものの、あくまで『議会制民主主義政体を維持する』として、他の星系のように帝国保護領への道を拒否したのを受けてのことだった。刺激を受けたのか、シヴァ、パルメンドらイゼルローン回廊に近い星系がエル・ファシルに追隨する動きを見せているという情報もあった。

「今の所、吾々には六〇〇隻そこそこの兵力しかありませんし、実際、これ以上の兵力を持ったとしても補給が続きませんからね。イゼルローン要塞を手に入れ、エル・ファシルやその周辺星系を後背宙域として確保すれば、この二〇倍や三〇倍の兵力は確保できますし、ヤン提督エル・ファシルにありとなれば、同盟領の全域から提督のもとに集まってくる兵力も期待できます」

「その前に帝国軍に撃破されなければ、だけれどね」

「失望させるようなことを言わないでください。ヤン提督なら、皇帝ラインハルト自身と戦っても勝てると思ってるんですから」  
「信じるのは自由だけど、信じれば想像が現実になるなんて勘違いしないでくれよ、アッテンボロー」

「ご説、胸に刻んでおきますよ」

「まだ、イゼルローンに行くには早すぎる」

「何を待っているんです。待ってたって年金は返っちゃ来ません

よ」

「ハイネセンから離れた時点で年金は諦めているよ」

「そりゃ、そつでしようとも。提督なんかまだ何ヶ月か年金がもらえただけでも良いじゃないですか。提督についてきた連中はみんなもらう前に年金生活なんか夢のまた夢って消え去っちゃまったんですからね。その分の責任はしっかりとつてもらわないと」

「おいおい、そんなことまでわたしに責任を要求しないでくれないか。今は、帝国と同盟の未来のことで手一杯なんだから」

「そつですか、そつは見えませんが……」

「どつ見えるんだ？」

「失われた憧れの年金生活への懐旧と哀惜に浸っておられるように見えますけどね」

アッテンボローはにやにや笑いを浮かべながら、行儀悪く司令官席の椅子に片膝を抱え込んだ姿で紅茶を喫しているヤンの姿をためつすがめつ眺めた。紅茶はヤン夫人のフレデリカが淹れたものだが、香りとヤンの様子から判断するところ、それなりに満足のいく出来ではあるようだ。食事の用意の方は相変わらず好不調の波が大きいようだ。幸いにも一行にはキャセルヌ夫人が同行してくれているし、フレデリカも主婦業への専念は断念したようだ。ヤンが栄養失調で倒れる心配だけはなさそうだった。

「そついえば、ユリアンはどつしていますかね？」

「無事さ、決まっているだろつ」

「何か、情報が入ったんですか？」

「いや……」

顔をつるりと撫で、ヤンは紅茶の最後の一口を咽喉に滑り込ませた。アッテンボローの見立て通り、ユリアンには及ばぬものの、

香り、味共に彼の味覚を満足させるレベルにはどうやら達しているが、それだけに地球へ旅立って既に半年近い亜麻色の髪の少年……というより既に青年の年齢に達していたが……が思い出されてならなかった。

「何もないが、ユリアンのことさ、無事であるに決まってる」

この時点でヤンはまだ知らないことだったが、ユリアンが地球教本部への潜入に成功し、一度は危機に陥ったものの、ワーレン艦隊の来襲を奇禍として地球教の正体につながる貴重な情報を持ちだしていたことは史実の記す通りである。持ち出された情報が、この先、ヤンやユリアン、ひいてはラインハルトやキルヒアイスの運命にどのような影響を与えることになるのか、それはまだ語るべき時ではないのだが。

「……そうだ、忘れるところだった。サインをお願いします」

アッテンポローが差し出したのは、巡航艦『ハリファックス』

艦長の任命辞令だった。

「グレーチェン・ヘルクスハイム大尉？……あの、元気の良いお嬢さんか」

『ハリファックス』はヤンのバート脱出時に偶然行き会った、テルヌーゼン泊地でのモスボール化予定の艦隊の内の一艦だった。戦闘や演習ではなく、単なる移送航行だったため艦長も予備役の老大尉だった。他の多くの艦が同様の状況にあり、艦隊運用の責を担うアッテンポローとしては、まずは艦艇レベルでの指揮運用能力向上に意を払わざるを得ないところだった。

「これは現職の希望でもありません。年齢的に苛烈な戦闘には耐えられそうにない、前線への補給任務で役に立ちたいと言っています」

「で、ヘルクスハイム大尉の方は？」

「やる気満々と聞いたところですね。彼女は実績もありますし、何とつかちょっとしたカリスマというか、自然と人がついていくようなところがありますから。まあ、皇帝ラインハルトみたいに圧倒的なオーラってんじゃないですがね。例の彗星の戦いでは、これはもう立派な戦隊レベルの指揮能力を証明しています。今更、巡航艦一隻の艦長でもないような気がしますが、いきなり大佐や准将ってわけにもいかんでしょう」

「皇帝ラインハルトは二〇歳でもう二万隻の艦隊を率いていたよ。年齢で能力を測るのはどうかな」

「アスターテ……ですか」

ヤンが初めてラインハルトと見えた戦いの名を上げ、アッテンポローは軽く唸った。

「まあ、彼女がもう一人の皇帝だったとすれば、放っておいても頭角は現すでしょうしね」

「そうなら私が随分と楽ができることになるんだが……」

「彼女が生き延びたら、戦艦の艦長間違いないでしょうし、うまくすればフィッシャーの小父さんの跡継ぎになってくれると踏んできます」

「彼女も年金生活を棒に振った口だね」

やれやれという口調だった。一口に二万人弱という。ラインハルト・フォン・ローエングラム、あの壮麗にして華麗なる軍事の天才を相手に、二万の人生と未来、それらに責任を取らねばならないというのは些か身に余る重荷と言っべきだろう。もっとも、彼ら全員に『私が全責任を負う。黙ってついてこい』などと啖呵を切るつもりなど、ヤンには全くない。啖呵を切ったところで、シエーンコップなどは、似合わぬことをなさるもんじゃありませんなど、擲

揃うただけだろうし、キャゼル又あたりなら『馬鹿やってないで、仕事しろ、仕事』というあたりか。

「まあ、強いられてのことはありませんからね。自ら選び取った選択肢です。提督が何もかも背負い込む必要はないと思います」

「別に責任は感じていないさ、特にアッテンボロー、きみとか、シエーンコップとか。伊達と酔狂で騒動を面白がってるような連中に責任を感じる謂われはないからね」

それはどうも……苦笑いしつつ、アッテンボローは引き下がった。

その背を見送って、ヤンは再び一人思い沈んだ。アッテンボローの言いつ通り、イゼルローン要塞を奪回し、エル・ファシルに根拠地を置いてヤンがその所在を明らかにすれば、エル・ファシルに呼応する星区も現れよう。ヤンの旗幟の許に馳せ参じる現役・予備役の軍人も多数に上るかも知れない。だが、それは同時に帝国軍の耳目をエル・ファシルとイゼルローンに集中させ、皇帝ラインハルトの激発と電撃的な侵攻を誘う結果になるに違いない。エル・ファシルには帝国軍を防ぎ止める要塞はなく、必然的に要塞に立てこもっての防禦戦となるが、効果的な要塞戦闘を繰り広げるには、少なくとも旧ヤン艦隊程度の兵力が必要となる。まして、今回は回廊の両側からの攻撃を想定しなければならぬのだ。

そして、皇帝ラインハルトが、迎撃に十分な兵力を蓄えるだけの時間を与えることもあり得ない。ヤンと互角の兵力で対峙することへの、ある意味での流血のロマンティシズムとは必ずしも無縁でないにしても、用兵者としてのラインハルトの合理性がそつした無用のロマンティシズムを凌駕することをヤンは欠片ほども疑っていないかったのである。

それにヤンの望みは……要すれば、帝国と同盟、というよりも皇帝専制と民主共和主義、複数の政治体制の共存である。別に帝国を倒す必要もないし、人類社会全体が民主共和主義を奉じねばならない絶対的な法則が宇宙を支配しているわけではない。ヤンは、かつてラインハルトの前でも口にした通り、複数の選択肢があり、それを人々が選び取り得る自由を確保したい。宇宙に於いて複数の政治体制の並立が許されること、それに尽きると言っても良い。

やはりキルヒアイス帝国大公か……イゼルローンを奪取すると同時にキルヒアイスに接触し、何らかの交換条件、イゼルローン要塞の返還でも良いし、これは余りやりたくはないがヤン自身が帝国に人質として赴くというのでも良い。生命まで奪られるのは困るが……ともかく、どれほど細やかであっても民主共和制の種子の保存のためには皇帝ラインハルトという壮麗なゴールに達せねばならず、そのための関門こそキルヒアイス帝国大公なのではないか。ただ、その関門を開くのは容易ではない。優しげで大人しやかに見えて、あの赤毛の名将に首を縦に振らせるためには、彼が納得するだけの条件を示さねばならない。

単純な利害で動く人物でないことは確かだった。絶対に譲れない価値に関わる条件を提示しない限り、キルヒアイスは動くまい。イゼルローン要塞を返すから……と申し出れば、『ありがとっ、要塞は貰っておきますが、これはもともと帝国のもんですから』とでも切り返されそうだった。そのキルヒアイスが同盟、あるいはヤンとの全面的な軍事対決は可能な限り避けようとしている。そのあたりには何らかの鍵はないだろうか。

あることに思い当たり、ヤンは眉を寄せた。

前提条件を整えるための軍事作戦はやむを得ないとしても、軍

事的に決定的な勝利の後には、可能な限り流血を避けるよう、同盟を経済的に徐々に締め上げ、内部から分裂させて最終的に帝国に併呑する。構想の確実さ、堅牢さは端倪すべからざるものではあるとしても、皇帝ラインハルトの為人には相応しくない。

「あるいは、キルヒアイス帝国大公はこれ以上、皇帝に戦争をさせたくないのかも知れないな」

他者に、たとえばアッテンポローあたりには正面から問われれば、明快な根拠は示せまいが、ヤンは自分が誤っているとは思えなかった。これまでの対同盟外交がキルヒアイスの主導で為されているとすれば、彼の狙いは自然な形で政策に現れてくる。バーラトの和約を始めとして、その後の帝国の政策は悉くが正面からの戦いへの回避を示していないか。

「回避じゃないな」

無論、キルヒアイスが主導したとしても、帝国の頂点に立つのがラインハルトである以上、ラインハルトもまたキルヒアイスの考えを良しと判断し、許可し推進せしめるだけの度量を示したものだ。そう判断しても良いだろうが、いずれにしても、キルヒアイス帝国大公という難解な関門に対する鍵として、これが手掛かりはならないだろうか。

ヤンは顔を上げ、今は主婦の立場からもとの副官としての任務に戻っている、彼の妻を呼び出した。

手が空き次第に作戦会議室に行くように。ヤン提督が聞きたいことがあると言っているのだ。フレデリカからの連絡を、グレーチェンはさして疑念も持たずに受けとった。バーミリオン会戦の前にはローエングラム公ラインハルトのことについて知る限りのこ

とを語ったが、ジークフリード・キルヒアイスについては余り語るものがなかった。

「ヘルクスハイム大尉！」

作戦会議室に向かう途中、こちらは作戦会議室から下がってきたらしいアッテンポローに呼ばれた。

「どこへ行くんだ？」

「作戦会議室です、閣下。ヤン提督がお呼びだというので」

「ああ、また何か思いついたかな。ああ、『ハリファックス』、貴官に任せる。ヤン提督の許可も頂いた。航海士にセーデル中尉、電子戦士官にヴァイラルド・ウアン中尉、先任下士官にコティ兵曹をつけてやる」

「感謝します、閣下！」

「頼むぜ、おい」

グレーチェンの肩を軽くぽんと叩くとアッテンポローはそのまま通路を逆方向に姿を消す。入れ替わるように現れたのはベンドリングだった。その姿を目にして、グレーチェンは心臓が軽くとんと音を立てて跳ね、自然に頬が軽く上気するのを感じた。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ、そなたも呼ばれたのか？」

「ええ。まあ、何を訊かれるのかは大体予想は付きますが」

ベンドリングに伴われて同盟に亡命して、もう七年余りになる。逆に言つとまだ七年しか経っていないのかと思われるほど、亡命以来のグレーチェンとベンドリングの日々は多事多端だった。ジークフリード・キルヒアイスに想いを寄せるの余り、亡命と同時に軍人への道を歩んだグレーチェンに対して、ベンドリングが軍務への意思があったとは思われない。最初は軍囑託の少佐待遇に過ぎなかったものが、運命のいたずらに翻弄されるがままに正式の少佐として

統合作戦本部情報部で帝国情報分析の任に就き、気づけば情報部長代行の肩書きを帯びていた。さらにパーミリオン会戦前後のドタバタで同盟軍の人材が払底する中、肩書きから代行が外れ、階級も帝国軍時代を上回って大佐の肩章を帯びるまでになっていた。

同盟軍の中で累進したとは言え、ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングの忠誠がひとえに自分へのみ向けられてきたことを、グレイチェンは痛いほど感じているし、この人物を後見人として与えてくれた幸運には感謝する以外にないと思っている。実際、ベンドリングに何度、生命の危機を救われたことが。彼の存在がなかったら、今頃、グレイチェン・ヘルクスハイムという人間はこの世に存在していなかったに違いないのだ。

「悪いね、忙しいところを」  
見慣れた、収まりの悪い黒髪と黒い瞳の、一向に軍人に見えない人物が二人を迎えてくれた。

「とんでもないです、閣下」  
「多分、予想は付いているとは思いますが、ちょっと聞かせてくれないかな、ジークフリード・キルヒアイス帝国大公のことだ」

やはりその件が、グレイチェンはベンドリングと目を見交わし、頷いた。

「わたしの……いえ、小官の分かる限りのことをお話しします。何でもお尋ね下さい」

亡命の際、彼らと行を共にしたのは数日に過ぎなかったから、ラインハルトに関する時と同様、話すべきことはさして多くなかった。ただ、グレイチェンはパーミリオンでの負傷加療中にキルヒアイスと再会しており、その時の彼に関する記憶は新しい。ただ、ひどく話しづらかった。

「……その、つまり、わたし……小官は、そのキルヒアイス提督が、その……好きで、その……」

求愛したが、キルヒアイスには「すでに思い定めた人がいる」と拒まれたと語ったとき、グレイチェンは耳朶まで真っ赤になっていた。まして「たとえ一夜のことでもよい。わたしを女子おなごとして辛してくれることも、叶わぬのか」などと口走ってしまったことなど赤面を通り越して顔面から火が出そうだった。

「……その相手が、皇帝ラインハルトの姉君のグリューネワルト伯爵夫人、いまは大公妃の称号を帯びておられるようですが、そのグリューネワルト大公妃……確か名はアンネローゼと申されたと思います」

「皇帝ラインハルトの姉君……グリューネワルト大公妃アンネローゼ……ね」

「ええ、キルヒアイス提督はこうも言いました。彼にとつて、ラインハルトという人は自分の半身のようなものだ。決して失つことはできない……と」

「なるほど……これは仮定の質問だから、想像の範囲で答えてくれて良いが、同盟との戦いが続くことが皇帝ラインハルトにとつて良くないこと。キルヒアイス帝国大公がそう判断するとすれば、それはどんな時だろうか？」

「戦いが皇帝の心身を毒すると判断したとき、だと思えます、提督」  
グレイチェンの回答に躊躇いはなかった。

「戦いは劇薬のようなもの。ジークフリード・キルヒアイスは戦いの功罪を十分心得ている人物です。彼の目には、戦争とは絶大な効用と恐るべき副作用を兼ね備えた、極めて扱いの難しい劇薬のよう映っているのだと。彼にとつて『半身』の皇帝が、そんな劇薬を

取り過ぎることを、彼が警戒していたとしても何の不思議もありません」

「劇薬……確かに劇薬だね。そうか、キルヒアイス帝国大公は皇帝と戦いのことをそんな風に考えるかも知れないのか」

グレーチェンはかなり躊躇ってから言葉が続けた。ジークフリード・キルヒアイスが戦いを毒と判断するとすれば、その戦いが皇帝ラインハルトにとって守りの戦いである場合ではないか。これまでラインハルトとキルヒアイスはまっしぐらに帝国、そして人類の頂点を目指して戦ってきた。戦い勝ち取るための戦いであるからこそ、ラインハルトは『その為人、戦いを嗜む』と言われるまでに戦いの場に赴き続けた。二〇代にして帝位に就いた今、人の平均的な寿命で言えば、ラインハルトはなお数十年、皇帝として玉座に君臨することになる。古代の霸王の言にもある。王と言ひ皇帝といふ、その職責は国家という庭を不断に見張り続け、這い込もうとする害獣や雑草を取り除くことに他ならない。誰にもその責を預けることも叶わず、勝ち得る喜びに代わってひたすら守り続ける、耐えがたい重荷をただ一人、生涯にわたって負い続けるようなものだ。」「同盟との新たな戦いがそれに当たるかどうかは分かりません。」

ジークフリード・キルヒアイスの為人として、そう考えるかも知れない。私……小官にはそう思えます。ただ、そうであったとしても、やはり皇帝ラインハルトが戦いを嗜む人であることに変わりはないと思います。」

皇帝の視野に入るための道は、戦いの向こうにしかない。キルヒアイスですら、戦いの野を避けて、他者を皇帝の眼前に導くことはできないのではないか。矛盾するようだが、皇帝ラインハルトの帝国と新たな和を結ぶには、戦いを避けて通ることはできないかも

しれない。

ヤンの黒い瞳がにわかに透明度を増し、底知れぬ湖水を思わせて透き通るような錯覚をグレーチェンは覚えた。何かしら人ならぬ者の瞳の奥底、その奥には見ではならぬ禁忌の異世界が広がっているのではないか。あらぬ妄想に駆られグレーチェンが身震いしたときには、ヤンの表情は既にいつもの穏やかな、一向に芽の出ない若手字者のようなそれに戻っていた。

「一つ、気になることがあります」

ベンドリングが沈黙を破った。未確認情報なので、無条件に信じて頂くわけにはいきませんが……前置いて、ここ二、三ヶ月、国内で『皇帝陛下、静養』を報じる報道が頻度を増している。

「同盟を軍事的に降り、新たに帝位に就いた。一つ節目がついたところで一旦休息を取る。あり得そうですが、私の知るラインハルト・フォン・ミューゼルには馴染みません。あるいはキルヒアイス帝国大公が皇帝の健康に不安を持っていて、基本的な方針として同盟との全面戦争の再開は回避すると決めている……これも完全に屋上屋を架するような仮説でしかありませんが」

「分かった。それも可能性の一つとして上げておくことにするよ。忙しいところをありがとう。後からでも良い、彼らについて思い出したり思いついたことがあったら知らせてくれるとありがたいな」肩を並べて退出しながら、グレーチェンはベンドリングの背に声をかけた。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ……その、わたしがジークフリードに、その言った言葉だが……」

「一夜で良い……の一言ですか？」

ベンドリングが振り向く。いつに代わらぬ後見人の温顔だった

が、グレーチエンはまともに視線を合わせる事ができない。

「あ……ああ……あの時は、夢中で……」

「分かっていますよ、グレートヒエン。あなたがどれほどジークフリード・キルヒアイスに焦がれていたか。七年、一緒にいたんです。

私の目はそんなに節穴ではありません……と、これは何度も申し上げましたね」

「す……済まない」

「どつして私に謝るんです」

ベンドリングの声は笑いを含んでいた。明らかにグレーチエンの困惑を楽しんでいるのだが、グレーチエンとしては羞恥と困惑が怒りを上回ってしまい、言葉を選ぶ余裕すらないのだ。

「では、本心ではなかったと？」

「それは……」

首筋まで真っ赤になって、グレーチエンは視線を通路の舗面に落とした。本心だった。本気でそれでも良い、とあの時は思っていた。

不意に肩を抱かれ、グレーチエンはびっくりして顔を上げる。

その唇を、ベンドリングの唇が素早く塞いだ。一瞬抗いかけ、グレーチエンは身体から力を抜く。何故か、これが自分たちの当然のあるべき姿であるかのような、そんな気がしてグレーチエンから抵抗の力を奪ったのだ。

さして長い時間ではなかった。軽く肩を押され、グレーチエンは信じ難いことが起きたような、彼女らしくもなく半ば呆然として右手指で自分の唇に触れていた。

「ジークフリード・キルヒアイスが相手ならやむを得ないと思っていましたし、あなたがどれだけ本気だったかも知っていました……」

でも……」

微笑い、ベンドリングは鮮やかな敬礼で表情を隠した。

「彼以外には譲りません」

身を翻し、足早に立ち去っていく後見人の背に、グレーチエンは頭の中が真っ白になったような感覚に呆然と立ち竦んだ。

「あ……」

不意に理解が生じ、視界に色彩が戻ってくる。

「ヴェンツェル・ハインリッヒ、ヴェンツェル・ハインリッヒ、譲らないって何をだ、一体誰に何を譲らないって言ったんだ。待って待ってくれ、ヴェンツェル・ハインリッヒ！」

応えはない。グレーチエンは小さく地団駄を踏み、ちょうど通りかかった女性下士官の視線に気づいて慌てて音量を押さえ込む。

「ヴェンツェル・ハインリッヒのばかっ!!」

薄く淹れた紅茶色の髪、青紫の清映な瞳が印象的な女性士官……グレーチエンよりもまだ年下、一五六歳の少女に見えたが、肩章は空戦隊伍長だった……が軽く目を睨って敬礼してくるのに、グレーチエンは答礼を返すのがやっとで、その視線が明らかに奇異なものを見るものであることには気づかない。それが、顔から耳朶、首筋まで桜色に上気させている女性大尉への好奇の視線であることにも、グレーチエンはついに気づかなかった。

「何よ、あれ」

慌てふためいて……と彼女の目には映った……彼女に答礼を返した、淡い金髪の女性士官の背を見送った、カリンことカーテローゼ・フォン・クロイツェルの唇から低い呟きが漏れた。彼女の視野

に映ったのは、大佐肩章をつけた男性士官が不意にその女性士官を抱きしめて強引に唇を合わせたシーンだった。

「こんなところで女を口説くなんて最っ低！」

係累の一切がないとして『動くシャーウッドの森』に志願したときには、当分の間、父親の噂すら聞かずに済むと思っていた。

兵士たちの噂の中、血統上の父親であるあの男の愛人の名が長大なりストとなって伝えられていくのを耳にするのが苦痛でならなかった。どのような事情があるにしても、母エリザベート・ローザラインがあの男の愛人の一人となった結果が自分だという事実が、カリンには耐えられなかったのだ。

にもかかわらず、彼女の血統上の父親はヤン提督と共に不意に、この根拠地に、つまりは彼女の面前に現れた。それだけでも十分に気鬱なのに、こともあろうに他の士官の『ナンパ』シーンを目の当たりにさせられ、カリンは不快と嫌悪のカクテルをグラス一杯に仰がされたような気分だった。

女性士官の方は直接の面識はなかったが、『彗星の戦い』は同盟軍内でも十分すぎるほど喧伝されている。同盟軍将兵では彼女を知らない方が不思議だった。カリンと幾つも違わない歳で、帝国軍に泡を吹かせるほどの女性が、どういっわけかあっさりとの大佐の口づけを受け入れてしまっていたことが不快の上に不審と不満を塗り重ねた。

「ヘルクスハイム大尉もヘルクスハイム大尉よ。横っ面ひっばたいてやれば良かったのに、あんな軟弱なやつ！」

数ヶ月前に別の人物を評したのと同じ言葉を、カリンは吐き捨てた。